

「実習後のナラティブを導入したカンファレンスによって
助産学生から語られた内容」

—ナラティブアプローチが与えた学生への影響—

“The content that was recited by the conference that I introduced
narrative after the training into by an obstetrical student”

-Influence on student whom narrative approach gave-

三浦 恵津子¹⁾

Etsuko MIURA

今崎 裕子¹⁾

Yuko IMAZAKI

近藤 潤子¹⁾

Junko KONDO

勝山 千勢¹⁾

Chise KATSUYAMA

津田 万寿美¹⁾

Masumi TSUDA

須貝 麻由美¹⁾

Mayumi SUGAI

和田 サヨ子¹⁾

Sayoko WADA

要旨

「目的」:助産学生の臨地実習後にナラティブを導入したカンファレンスで学生から語られた内容を明確にし、学生に与えた影響を考察する。「対象と方法」:本大学院学生で、研究への協力に同意を得られた者5人を対象とした。ナラティブカンファレンスで、語られた内容から逐語録を作成し質的・帰納的に分析を行った。「結果」:第1回ナラティブカンファレンスでは【実習中の自分を支えた因子】【実習を困難にしていた因子】【自己の内的因子】の3カテゴリーが抽出された。語ることで学生はカタルシスを得た。第2回ナラティブカンファレンスでは【実習体験の振り返り】【客観的自己への気づき】【カンファレンスで得た気づき】【他者への理解】【自己課題の発見】の5カテゴリーが抽出され、話す聴くことの大切さを実感し理想の助産師像につなげることができた。

“Content from narrative that I introduced at a conference was presented by an obstetrical student”-Influence of the narrative approach on a student-

Purpose: In a conference where I introduced narrative after attending actual practical midwifery training, I clearly presented content provided by a student and examined the influence on that student. **Methods:** In a school for apprentices, I intended to obtain informed consent to cooperate in a study from five people. At the conference, I presented the narrative, and transcribed the recited content; made a qualitative analysis; and analyzed the data inductively.

1) 天使大学大学院助産研究科

(2019年10月30日受稿、2020年4月1日審査終了受理)

Results: From the first conference introducing narratives, three categories were extracted: [factors that supported me during the training], [factors that made the training difficult], and [my own internal factors]. The student gained catharsis through presenting the material. Five categories regarding [discovery of the individualized problem] were extracted from content presented in the second narrative conference [I obtained it in a conference notice], [understanding others], [reflecting on the training experience], and [objectively noticing myself], and the students were able to realize the importance of listening to speeches.

キーワード：助産学生 (midwifery student)
臨地実習 (practical training)
ナラティブ (narrative)
カンファレンス (conference)

I. はじめに

国際助産師連盟（以下 ICM）の「助産師教育基準」¹⁾では、「質の高い、根拠に基づく医療サービスを女性、新生児、家族に提供するために、資格のある助産師を育成することによって、世界中の助産師を強化する ICM の重要な柱のひとつである」と示されている。

本学 T 大学助産専門職大学院では、専門職大学院ならではの豊富な臨地実習期間が学習カリキュラムに組み込まれている。助産師の声明の倫理綱領²⁾では「助産師は、人格を陶冶し専門職としての実践能力の向上を目指し、助産実践や助産研究、ならびに助産師としての生涯教育に参画する」とされている。そして、ドナルド・A・ショーン³⁾は「“省察的実習”に関わる学生、コーチ、教師すべてのものが通常の教育実践を超える水準の省察を要求される」としている。つまり専門職である助産師がどのように自分自身を成長させ、助産師としての技術を向上させていくのかという基本を学ぶ機会の開始こそが 1 年生での臨地実習（以下実習）であろう。

ICM の掲げる質の高いケア⁴⁾とは、「相手を尊重し、母子のニーズを重視したケア、そして、豊富な知識を備え、相手の心に寄り添う能力を有した助産師が提供する安全なケア」である。トラベルビー⁵⁾は、「“患者”と“看護婦”ではなく人間対人間の間関係を結ぶためには看護婦の役割を超越しなければならない」としている。学生が対象者を包括的に理解しようとするためには、同時に自己理解を深め高めていけることが必要であると考え。学生が自己理解を深めるために私たちは今回、ナラティブを導入したカンファレンスに着目した。野口⁶⁾によるとナラティブとは「“語る”という行為と“語られたもの”という行為の産物の両方を同時に含意する用語である」としている。つまり語った内容だけではなくその行為の産物においてもナラティブであることを示している。植村他⁷⁾

は、ナラティブの効果として「相手の全人間的理解や自己の行為の客観視と意味づけ」をもたらすとし、ナラティブを看護実践や看護教育に取り入れる必要性を述べている。

ナラティブを教育に取り入れた先行研究⁷⁾⁸⁾は、対象者とのケアを通して学生が語ることで、対象者を理解したり、対象者との関係性を深めるなどの一連の成果があったと報告している。しかし、助産学生の実習後にナラティブを導入したカンファレンスにおいて学生が語りたことを語るということは、対象者のケア内容についての語りにとどまることはない。学生が実習で経験した多くの出来事から何を語りたかったのかを明らかにすることは、多くの学びを得るための整った実習環境を提供するために重要な観点であると考え。

II. 研究目的

ナラティブを導入したカンファレンスによって学生から語られた内容及び現象を明確にする。また、ナラティブを導入したカンファレンスの関わりが学生にどのような影響を与えたのかを分析し考察する。

III. 用語の定義

「ナラティブを導入したカンファレンス」とは“カンファレンスの場に居る学生全員が語ったすべての内容と現象”とする。学生ができるだけリラックスした環境の中で、自己の実習経験を同級生に“語り”、また同級生の臨床経験を“聴き”分かち合うことであり、学生の様子も含んだものである。（以下ナラティブカンファレンス）

「学生」とは、T 大学助産専門職大学院在学中の助産学生である。（以下本大学院学生）

「マタニティサイクル助産ケア統合実習 I」とは、T 大学助産専門職大学院で実践される 12 週間の実習である。妊娠期・分娩期・産褥期において、継

統的・総合的に対象者とその家族を理解し助産ケアを実践することを主な目的としている。(以下統合実習 I)

「教員」とは、T大学の実習を担当している教員である。

「臨床指導者」とは、臨床における学生を指導する助産師である。

「実習メンバー」とは、学生が同じ実習施設で実習を行っている同期生のことである。

IV. 研究方法

1. 研究対象

本大学院 1 年生は全員で 13 名であり、その中で研究への協力を得られた 5 名である。

学生は統合実習 I (2017 年 11 月～2018 年 2 月 12 週間)の実習を終え、単位を修得した者である。

2. 研究期間

2017 年 11 月 1 日～2019 年 2 月 28 日

3. データ収集方法

統合実習 I 開始前、研究対象である学生全員と本研究協力者の教員が、ナラティブを共通理解するために、研究協力者であり実習に直接関わっていない W 助産師による講義を実施した。

次に統合実習 I 終了後、本大学院 1 年生全員に対し研究の目的、内容、方法、公表の仕方を口頭、文書で説明し、研究への協力を得られた学生 5 名と W 助産師でナラティブカンファレンスを行い、その様子をレコーダーに保存した。ナラティブカンファレンスは同じ学生 5 名に対し統合実習 I が終了して約 2 週間後と 3 か月後の 2 回実施した。

カンファレンスは学内の静かな場所を選択し、関係者だけの空間が守れるようにし、学生がありのままを自由に語れるように配慮した。

4. 分析方法

カンファレンスを録音したテープから逐語録を作成し質的・帰納的に分析を行った。逐語録作成の際、カンファレンスの内容を正確にデータ化するために笑いや泣き、沈黙についても記録し可能な限り詳細に記述した。また、学生の語りからその時の学生の思いや感情について漏れがないようにコード化し、その意味合いによってカテゴリー化し分析を行った。分析の解釈はナラティブカンファレンスの進行役である W 助産師に検討してもらい、合意を得た。さらに、妥当性を高めるために研究協力者である他の教員 5 名の意見を集約し、また本学特任教授にスーパーバイズを受け信頼性を確保した。

5. 倫理的配慮

研究の目的、内容、方法、公表の仕方を口頭、文書にて十分説明し対象者本人の意思で参加を決定してもらった。研究への協力や拒否が成績に影響したり、対象者の不利益にならないことを伝えた。

研究に協力することを承諾した学生においては、カンファレンス内容をレコーダーに保存するが、データは厳重に保管してこの研究以外に使用しないこと、また研究発表後完全に抹消することを伝えた。

この研究は T 大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。(認証番号 2017 - 17)

V. 結果

この研究に協力した学生 (A, B, C, D, E) は 5 名であり年齢は 20 代～30 代である。その内、看護師経験があるものは 1 名である。

1. 第 1 回ナラティブカンファレンスで学生から語られた内容 (実施日 : 2018 年 2 月 23 日 統合実習 I 終了後 2 週間)

カンファレンスは、進行役を務める W 助産師が

以下のように学生に話しかけ始まった。

「この実習の中で、語ろうかと思っているご自分がいらしたら話していただきたいと思います。その話の中で新しい自分を発見していただく時間になりましたら、私にとって膨大な喜びです。どなたからでもいかがでしょうか」

ここで話された学生の思いから 162 コードが抽出され、語られた意味合いから 18 サブカテゴリーに分けられ、最終的に外的因子である【実習中の自分を支えた因子】【実習を困難にしていた因子】そして【自己の内的因子】の 3 カテゴリーに分類された(表 1)。表 1 には主なコードのみを抜粋して表記した。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを『 』, コードを〈 〉で示した。なお、コードは学生が語ったままの形で概ね表現しているが、語りのままでは内容が不鮮明になる場合は研究者が逐語録を何度も読み返し、学生が語った意味が伝わるように補足した。各カテゴリーに対してのサブカテゴリーについて説明を加える。

1) 【実習中の自分を支えた因子】

このカテゴリーは学生が実習中に自分を支えてくれていた人や自分の思いなどに気が付き語った内容である。

『対象者との関わりや、ケアする楽しさ』『学生メンバーのサポート』『教員のサポート』『家族のサポート』『実習施設スタッフへの憧れ』『助産師になりたい』という強い意志』の 6 サブカテゴリーが抽出された。

『対象者との関わりや、ケアする楽しさ』は、〈対象者さんからのフィードバックに救われた〉〈「学生さんに受け持ってもらい良かった」と最後に言ってもらって、私も「ああ、私がいる意味ってあったんだ〉〈産婦さんとか褥婦さんとかに助けられて、自分の存在意義ってやっぱりあったな〉などのコードは学生が実習を行う上でたくさんの困難を感じ、実習現場に自分がいる意味さえも見失いかけていた。

『学生メンバーのサポート』は、〈本当にメンバーに救われた実習だった〉などのコードがあり、学生同士でつらい実習を支え合い乗り越えていた。また、地方の実習施設では学生が同じ宿舎で生活することで、今まで知らなかった学生の良さについても知ることができたという語りがあった。

『教員のサポート』は、〈あなたが受け持ちだから生まれないなどそういうことは全くなく、そういう波は誰にでもある。生まれるとか生まれないとか考えないで、無になって受け持ちなさい」と言われ、少し吹っ切れた〉というコードからわかるように、学生は分娩経験件数へのプレッシャーを感じていた。また、学生は今となってはそのようなことはないとわかるが、自分が産婦を受け持つことで、異常分娩になってしまうのではないかという思いも実習中は抱いていた。

『家族のサポート』は家族からの励ましの声掛けが学生の力になっていた。

『実習施設スタッフへの憧れ』は、〈助産師さんの分娩を見たり、授乳の指導などを見ていると、基礎実習で思っていたよりも「助産師さんは本当にすごいんだな」と強く思った〉〈助産師さんが優しかった〉など、学生は助産師が対象者とかかわる姿に憧れを抱いていた。

『助産師になりたい』という強い意志』は、〈助産師になるために学びたいことはたくさんある〉〈やはり自分は助産師になりたいんだと再確認した〉などのコードには、学生が実習で失敗したり自信を失いそうになりながらも必死に自分を奮い立たせている現実があった。

2) 【実習を困難にしていた因子】

このカテゴリーは、統合実習 I を続け終了することがどれだけ困難であったかを語った因子である。第 1 回ナラティブカンファレンスでは、すべてのコードを合計すると 162 となるが、このカテゴリーはそのうちでも 102 (62%) を占め学生の語りが最も多かった内容である。

表1 第1回ナラティブカンファレンスで学生から語られた内容（実施日：2018年2月23日 実習終了2週間後）

カテゴリー (3)	サブカテゴリー (18)	コード (162)	
実習中の自分を支えた因子	対象者との関わりや、ケアする楽しさ (コード14)	・実習で、受け持ちの人と会えるのはとても嬉しいし楽しい。 ・対象者さんからのフィードバックに救われた。 ・「学生さんに受け持ってもらい良かった」と最後に言ってもらって、私も「ああ、私がいる意味ってあったんだ」	
	学生メンバーのサポート (コード8)	・本当にメンバーに救われた実習だった。 ・学生Eさんがいなかったら越えられないと思うほどつらい実習だった。	
	教員のサポート (コード4)	・「あなたが受け持ちだから生まれないなどそういうことは全くなく、そういう波は誰にでもある。生まれるとか生まれないとか考えないで、無になって受け持ちなさい」と言われ、少し吹っ切れた。	
	家族のサポート (コード3)	・家族は、私が実習で家に帰って来ないので寂しいだろうに「がんばれ、がんばれ」って言ってくれていた。	
	実習施設スタッフへの憧れ (コード3)	・助産師さんの分娩を見たり、授乳の指導などを見ていると、基礎実習で思っていたよりも「助産師さんは本当にすごいんだな」と強く思った。	
	「助産師になりたい」という強い意志 (コード4)	・助産師になるために学びたいことはたくさんある。 ・やはり自分は助産師になりたいんだと再確認した。	
	外的因子	分娩経験件数へのプレッシャー (コード15)	・受け持ち産婦の分娩停止帝王切開が2例続いた。 ・「あなたが受け持つと、生まれる人を受け持たせていたのに全く生まれないよね」などと言われた。 ・周りに言われることで「私が受け持たなかったらスムーズに生まれたのでは」と考えるようになった。
		学生メンバーとの関係性 (コード3)	・あまり仲良くなかった学生と実習メンバーになった。 ・学生同士でぶつかることは何回かあった。
		臨床指導者や教員など指導者との関係性 (コード50)	・私が怒られている内容で、とても理不尽だと感じるところも色々あった。 ・先生との関わりにびくびくしてしまうようになった。 ・学生の存在自体邪魔と思われているのだなと感じた。
		実習経験が少ないことでの不安 (コード5)	・看護学生の実習では分娩を見たり沐浴など、技術的なところはほとんど経験していない。 ・看護学生の実習で分娩を見たことがないので、助産学生の実習で初めて赤ちゃんが生まれるのを少し足震えながら見ていた。そこからの実習スタートだった。
		劣等感からの自信喪失 (コード20)	・学生メンバーが臨床経験があるため、自分より知識など勝っていた。 ・「できない学生だ」と絶対思われているなって、どんどん自分に自信がなくなっていた。
		短所との相対 (コード5)	・臨床経験が邪魔をしている部分。 ・根拠が後付けになっているという自分のできない部分に直面してとてもつらかった。
		「助産師になりたい」という夢の揺らぎ (コード2)	・私はなんで助産師を目指したんだろうと、思ってしまった。 ・私は助産師を目指したらだめだったんだ。
	実習を困難にしていた因子	体調不良 (コード2)	・身体症状が出て毎朝吐き気に襲われた。 ・吐きそうで2人ともご飯を食べられなくなった。
自己の内的因子		自己の気持ちへの気づき (コード7)	・実習終盤で受け持った人に対し個性を十分にかす色々なケアをやりたいという気持ちが少し薄れてしまった。(ルーティン化したケアにとどまってしまった) ・実習の終わり、終盤だと思っている自分の気持ちが受け持ち褥婦に対して最低だと思った。
		自己の性格 (コード9)	・人間関係に悩むのは、私の性格である。 ・元々落ち込みやすいとか、そういう色んなことを気してしまうタイプである。
		カンファレンスに対する反応 (コード3)	・心が軽くなった。 ・今日こうやって、話を聴いたり話したり、泣くことで心が浄化される部分があるのかな、と思った。
		自己課題の発見 (コード5)	・人に優しくするために、まずは自分に優しくしていきたい。 ・自分の中で違うと思ったら「違う」と相手に対して伝えるべきだと思った。

『分娩経験件数へのプレッシャー』『学生メンバーとの関係性』『臨床指導者や教員など指導者との関係性』『実習経験が少ないことでの不安』『劣等感からの自信喪失』『短所との相対』『「助産師になりたい」という夢の揺らぎ』『体調不良』の8サブカテゴリーが抽出された。

『分娩経験件数へのプレッシャー』は、学生は自分が受け持つから生まれないということはないと思いつつも、何度も同じことを言われ続けることで「私が受け持たなかったらスムーズに生まれたのでは」と考えるようになった。

『学生メンバーとの関係性』は、統合実習Ⅰ開始

時に学生メンバーに対し不安を感じていた部分があったが、実習が進んでいくことでその気持ちは【実習中の自分を支えた因子】の中の『学生メンバーのサポート』に変化していた。

『臨床指導者や教員など指導者との関係性』は、臨床の現場で学生は挨拶を返してもらえなかったり、カルテをスムーズに見せてもらえなかったり厳しい環境の中で実習を行うことで〈人格を否定されたように感じてしまった〉〈私がここの学校にいること、今実習にいること自体、存在自体が否定されているのかなと思った〉と徐々に精神的に追い込まれていった。

『実習経験が少ないことでの不安』は、看護学生の実習経験不足が学生に大きな緊張を与えていた。

『劣等感からの自信喪失』は〈学生メンバーが臨床経験があるため、自分より知識など勝っていた〉と学生は語り、その理由を臨床経験がある学生に対し〈教員やスタッフも臨床経験があることを認めていた〉と感じていた。そのことから〈どんどん自分に自信がなくなっていた〉ということだった。

『短所との相対』は、〈臨床経験が邪魔をしている部分〉〈根拠が後付けになっているという自分のできない部分に直面してとてもつらかった〉などのコードであり、学生は臨床指導者の厳しい指導から自己の未熟さを痛感し、繰り返し厳しい指導を受けることでつらさが助長されていた。

『「助産師になりたい」という夢の揺らぎ』での〈私はなんで助産師目指したんだろうと、思ってしまった〉というコードは、学生が自分の不甲斐無さに涙を流したとき、教員に「何で泣くの。泣かれると何も指導できない」と言われ、臨床指導者と教員の間で挟まれ自分の居場所が無くなっていったことで生じた感情であった。その他〈私は助産師を目指したらだめだったんだ〉というコードがあげられた。

『体調不良』は、〈身体症状が出て毎朝吐き気に襲われた〉〈吐きそうで2人ともご飯食べられなくなった〉というコードであり、学生は厳しい実習

環境にさらされる中で徐々に体調不良に陥っていた。

3) 【自己の内的因子】

このカテゴリは【実習中の自分を支えた因子】【実習を困難にしていた因子】いずれにも当てはまらない自己の内面的な因子であり、『自己の気持ちへの気づき』『自己の性格』『カンファレンスに対する反応』『自己課題の発見』の4サブカテゴリが抽出された。

『自己の気持ちへの気づき』は、〈実習終盤で受け持った人に対し個別性を十分にいかす色々なケアをやりたいという気持ちが少し薄れてしまった〉などのコードであり、学生は実習で最後の受け持ちとなった褥婦に対し、ルーティーン化したケアにとどまってしまったと反省がり、これを「自分の黒い部分」と表現した。

『自己の性格』は、〈人間関係に悩むのは、私の性格である〉〈元々落ち込みやすいとか、そういう色んなことを気にしてしまうタイプである〉などのコードであり、自分の性格を語っている。

『カンファレンスに対する反応』の〈今はまずそれを話したかった〉というコードは、『分娩経験件数へのプレッシャー』を語った学生であり、ナラティブカンファレンスでは「まずこの話をしたかった」ということを語っている。また、ナラティブカンファレンスで自分が話したいと思える人々に話すことの効果を体験している様子を語っていた。

『自己課題の発見』は、〈話す必要があるということが起きた時にはそれを自ら発信しないといけないなと思った〉など、今回の実習のような困難にぶつかった時どのような努力が必要であるかを学生が語った内容である。

2. 第1回ナラティブカンファレンスで得たカタルシス現象

ここで学生が【実習を困難にしていた因子】に

ついて語ることで、カタルシスが得られている。カタルシス現象は学生 5 名のうちの 4 名（学生 B, C, D, E）にみられ、学生 A は涙する学生の話に聴き入りながら同調して涙を流した。【実習を困難にしていた因子】についてのコードは 102 抽出されており、その中で学生 B, C, D, E のカタルシスを得たおもなコードを学生別に抜粋し表 2 に記す。

3. 第 2 回ナラティブカンファレンスで学生から語られた内容（実施日：2018 年 5 月 2 日 実習終了後 3 か月）

カンファレンスは、進行役を務める W 助産師が以下のように学生に話しかけ始まった。

「第 1 回目のカンファレンスでは実習でのみなさんの物語を語っていただきました。1 回目のカンファレンスがどのような影響をあなたに与えましたか」

ここで話された学生の思いから 104 コードが抽出され、語られた意味合いから 16 サブカテゴリーに分けられ、最終的に【実習体験の振り返り】【客観的自己への気づき】【カンファレンスで得た気づき】【他者への理解】【自己課題の発見】の 5 カテゴリー

に分類された（表 3）。表 3 には主なコードのみを抜粋して表記した。なお、コードは学生が語ったままの形で概ね表現しているが、語りのままでは内容が不鮮明になる場合は研究者が逐語録を何度も読み返し、学生が語った意味が伝わるように補足した。各カテゴリーに対してのサブカテゴリーについて説明を加える。

1) 【実習体験の振り返り】

このカテゴリーは、学生が統合実習 I はどのようなものであったかを第 2 回ナラティブカンファレンスで語った内容である。『長くてつらい実習だった』『他の学生の実習体験についての意見』『実習できて良かったと思える』の 3 サブカテゴリーが抽出された。第 1 回ナラティブカンファレンスで語られた内容のほとんどが、実習がどのようなものであったかという内容を語っていたが、第 2 回ナラティブカンファレンスでは 104 あるコードのうち 18 のコード（17%）がこの内容に当てはまるものだった。

『長くてつらい実習だった』は、〈実習中も実習後も実習の話をするたびに、かなり泣いたりした〉

表 2 第 1 回ナラティブカンファレンスでカタルシスを得た学生の語り

学生	カテゴリー サブカテゴリー	学生の語った内容（コード活用）
B	実習を困難にしていた因子	・〈基礎実習でもお産があまりとれず、2 例で終わってしまった〉前期の実習から分娩件数に遅れを感じていた。〈受け持ち産婦が出血が多かったり、常位胎盤早期剥離になってしまったりなど〉周りの人に「学生 B さんそういうことが多いよね」という感じに言われる〉何度も言われ続ける〈私に関わることで、そういうことはない〉そう思いながらも〈自分に原因があるのではないか〉〈今後助産師として働いていく時にも、私に関わるうえで、そういう異常になったりするケースが多くなったらすごく嫌だ〉と考えるようになった。
	分娩経験件数へのプレッシャー	
C	実習を困難にしていた因子	・〈私が受け持つと、生まれないとか、そういうことを思っていた〉〈周りに言われることで「私が受け持たなかったらスムーズに生まれたのでは」と考えるようになった〉〈最後の 10 例目として受け持っていたが結局生まれなかった。「すぐ生まれると思ったのにどうしてまだ生まれてないの」〉〈考えられる促進のケアは全てやり尽くした〉のに「促進のケアが足りないんじゃないの？」
	分娩経験件数へのプレッシャー	
D	実習を困難にしていた因子	・〈先生からの言葉と、初めて母児分離経験したことなど、自分の中で余裕がなくなってそこで涙が止まらなくなってしまった〉〈先生に責められているというような感覚を私が持ってしまった部分もあった〉
	臨床指導者や教員など指導者との関係性	
E	実習を困難にしていた因子	・ 臨床指導者に受け持ち対象者の情報をなかなか見せてもらえなかったり、〈挨拶を返してくれない〉など〈辛い思いや経験があった〉〈ただ学びたいのに、そこにこのストレスの意味があるのだろうかと思った〉
	臨床指導者や教員など指導者との関係性	

表3 第2回ナラティブカンファレンスで学生から語られた内容（実施日：2018年5月2日 実習終了後3か月）

カテゴリー (5)	サブカテゴリー (16)	コード (104)
実習体験の振り返り	長くてつらい実習だった (コード4)	・実習中も実習後も実習の話をするたびに、かなり泣いたりした。 ・実習は嫌だったなどは思うが、今はその時のようにガクンと沈むようなことはなくなった。
	他の学生の実習体験についての意見 (コード10)	・ずっと苦しんで、「わかんない、わかんない」となるとどんどん視野が狭くなっていくという体験は私もある。 ・看護などの実習のシャドーイングで、「これはこうだよ」と1回聞いたらできることはいっぱいあると思う。
	実習できて良かったと思える (コード4)	・今は嫌だったというより、F病院で実習できて学べたことが良かったと思う。 ・理不尽な指導で「このように言われて悲しかった」と思ったが、その中にも良いことがあり、学びにつながったこともあった。
客観的己への気づき	実習中の自己 (コード7)	・悲しみや怒りがすごく渦巻く感情があった。 ・「先生に注意される」とビクビクしていたのと、基本的な看護技術なのになぜできないのだろう」という2つが混乱しており、自分の中で何がなんだかわからなくなっていた。
	第1回カンファレンス時の自己 (コード12)	・傷ついたり我慢していた自分を解放する必要があったのではないかなと今は思っている。 ・悲しかったこと、自分の中の怒りとか、苦しみという実習時の感情がそのまままだ熱を帯びている、すぐそのときの自分に戻ってしまうという感じの状態だった。 ・自分が嫌だったことがそのまま残っている時だったので、それを話して、また2か月くらい経って今こう考えると、あの時と今感じていることが少しずつ変わってきたのだと思う。
	現在の自己 (コード13)	・第1回ナラティブカンファレンスの時と同じレベルで悲しくなったりはしなくなっている。 ・自分がなぜ理不尽だった指導者のことも今は、受け入れられるようになったのかわからない。 ・基本的に自分は自分、他人は他人と最近思えるようになった。
カンファレンスで得た気づき	話す聴くことの大切さ (コード16)	・語ることでより実習メンバーへの感謝の気持ちが助長された。 ・皆が、自分を心配し心も体も支えてくれているということへの感謝の気持ちを自分は一生忘れたくない。 ・皆と話すことで実習がつかなくなったのは自分だけではないんだと心が軽くなり、我慢していた自分に気づくこと、ケースからの学びを改めて考えることができた。
	自己の成長 (コード4)	・お産は最後まで気を抜いてはいけないということも学ぶことができた。 ・学生のうちにハイリスクの現場を体験できたことは学びだった。
	他の学生の成長 (コード2)	・いやな実習だったがそれによって得たものがあるというのを、今学生Eさんが感じていることに、「ああ、すごい」と思う。
	自己の性格 (コード11)	・自分に厳しく頑張り過ぎている自分に気づいた。 ・自分のことを話すのは得意ではないので、今まで自分の話はしなかった。このように自分を解放して良いのだと気づいた。
他者への理解	カンファレンスへの肯定的体験 (コード4)	・あのタイミングで、この会（ナラティブカンファレンス）があったことは本当にすごい。すごい良いタイミングだった。 ・もしそのまま春休みに入っていたら、まだ自分の考えがつかなくなった実習の時に巻き戻されているのかと思う。
	臨床指導者への理解 (コード3)	・私も看護学生の時、あまり周りを知らなかった。この学校に入っているいろいろな文化があると知り、教育も文化の1つと聞いた。 ・指導者も、受けた教育がコースにより異なり、その文化も違うので、指導者によって学生に言うことも違うのだなと思った。
自己課題の発見	後輩に対する思い (コード1)	・助産師になりたいという看護の後輩がいたが、母性の実習内容では実際にケアの経験ができないことで助産の魅力に気が付くことができず、その夢を諦めてしまった人達もいた。
	目標とする助産師像 (コード9)	・目の前の受け持った方に感謝して集中すること、安心して産婦さんがお産ができるようにケアしていくことが私ができることだと思う。 ・ナラティブで聴くこと話すことが大事だと、すごく実体験しているの、対象者に実践していきたい。
	自分自身を大切にしたい (コード4)	・もっと楽に、楽しく実習も学校生活も、プライベートも送っていきたい。 ・自分の抱え込んでいた気持ちに気づいたり、自分を大切にしていこうと思った。

〈実習は嫌だったなどは思うが、今はその時のようにガクンと沈むようなことはなくなった〉などのコードであり、実習はつらかったが自分の過去の体験として語られていた。

『他の学生の実習体験についての意見』は、ある学生が指導方法に苦しめられたという語りがあり、

他の学生が似たような経験を話したり、適切な指導方法が他にもあったのではないかと語っている。

『実習できて良かったと思える』は、〈今は嫌だったというより F 病院で実習できて学べたことが良かったと思う〉〈理不尽な指導で「このように

言われて悲しかった」と思ったが、その中にも良いことがあり、学びにつながったこともあった〈一概に嫌なことだったということでもなかったのかな〉などのコードである。実習は、つらいことがたくさんあったが、学びや喜びもあったので実習できて良かったということを語っていた。

2) 【客観的自己への気づき】

このカテゴリーは『実習中の自己』『第1回カンファレンス時の自己』『現在の自己』と3つの時期に応じた自分を客観的に語っている。

『実習中の自己』は、なぜ実習時はあのようにつらかったのかを自分で分析している様子であった。

『第1回カンファレンス時の自己』は、実習が終了して2週間であったことで実習中のつらかった自分にすぐに戻ってしまう状況にあった。また、つらかった実習では傷ついていた自分がいたことに気づき、それを開放して良い場がナラティブカンファレンスであったという語りである。

『現在の自己』は、第1回ナラティブカンファレンスの時とは違って、学生が苦しめられた指導に関しても、自分なりの対処方法を模索しながら理解しようとしている姿であった。

3) 【カンファレンスで得た気づき】

このカテゴリーは、ナラティブカンファレンスを体験して、様々な気づきがあったり、率直な感想を語った内容である。『話す聴くことの大切さ』『自己の成長』『他の学生の成長』『自己の性格』『カンファレンスへの肯定的体験』の5サブカテゴリーが抽出された。第2回ナラティブカンファレンスでは104あるコードのうち一番多い37のコード(36%)がこの内容に当てはまるものである。

『話す聴くことの大切さ』は、話すことで心が軽くなる体験をしたことや、自分を支えてくれた人への感謝の気持ちがより一層強くなったことを実感したという語りであった。

『自己の成長』は、第1回ナラティブカンファレ

ンスでは、ハイリスクの経験が学生にとっては『分娩経験件数へのプレッシャー』となり【実習を困難にしていた因子】に分類された。しかし、第2回ナラティブカンファレンスで学生は、ハイリスクの現場を体験できたことが学びであったと思えるようになっていた。

『他の学生の成長』は、第1回ナラティブカンファレンスで学生Eの話の内容から、学生Eが体験した実習環境の過酷さを他の学生が知り、第2回ナラティブカンファレンスではその実習環境の中でも学びを見出している学生Eの姿に成長を感じ発した内容であった。

『自己の性格』は、自分が無意識のうちに頑張り過ぎてしまう傾向にあること、そして自分を閉じ込めてしまっていることに気づいたという内容である。

『カンファレンスへの肯定的体験』は、〈あのタイミングで、この会(ナラティブカンファレンス)があったことはすごい。すごい良いタイミングだった〉〈もしあのまま春休みに入っていたら、まだ自分の考えがつかない実習の時に巻き戻されているのかと思う〉などのコードであり、第1回ナラティブカンファレンスが実習終了後2週間で行われたことが、時期として良いタイミングだったという語りである。

4) 【他者への理解】

このカテゴリーは、臨床指導者や後輩に対しての思いを語った内容である。『臨床指導者への理解』『後輩に対する思い』の2サブカテゴリーが抽出された。

『臨床指導者への理解』は、学生は臨床指導者の指導に対し理不尽さを感じていたが、それは臨床指導者が学生の時受けた指導がそれぞれ違うためであるとし、指導方法への一応の理解を示した内容である。

『後輩に対する思い』は、看護学生の見学を中心とした実習内容に疑問を呈している語りである。

5) 【自己課題の発見】

このカテゴリーは、どのような助産師になりたいか、また、今後どのように過ごしていきたいかを語った内容である。『目標とする助産師像』『自分自身を大切にしたい』という2サブカテゴリーが抽出された。

『目標とする助産師像』は、学生は、今自分が対象者に対してできることを考え実践していきたいということ、そして、今回のナラティブカンファレンスで話を聴くことの大切さを実感し、対象者の話をきちんと聴いていける助産師になりたいということだった。

『自分自身を大切にしたい』は、学生は今回のナラティブカンファレンスで、傷ついた自分、我慢してきた自分に気づき、自分自身の心のケアも大切にしていく必要があることを語った内容である。

VI. 考察

ICM「助産師教育基準」¹⁾では、助産師の能力を開発するためには、短期間で限られた能力を身につけるのでは不十分とし、医療専門職資格取得後の課程の期間を18か月かそれ以上必要としている。また具体的には「能力獲得を重視した指導、臨床現場における実習の強化、的確なスタッフの利用可能性の改善などである」と示している。本大学大学院では、助産教育に2年をかけ世界水準にあわせた教育を目指している。1年生の実習は6月から9週間(基礎実習)、そして11月から12週間(統合実習I)予定されており、これまで学んだ知識を臨床現場で大いに活用し統合していく上で学生の成長が期待できる期間と考える。しかし、学生にとっては経験したことがない長期にわたる実習であり、学生のストレスも大きいといえる。なぜなら、いのちの誕生と向き合う責任の重さと、地方に移動しての実習になることや時間を選ばないオンコールなど生活リズムの変化、そして臨床

指導者や教員、学生同士の人間関係など、常にストレスフルな状況にある期間も長くなる。

本研究では研究協力が得られた学生(A, B, C, D, E)5名に対し、統合実習Iが終了して約2週間後と3か月後に2回のナラティブカンファレンスを実施した。ナラティブカンファレンスは、実習体験について学生が話したいことを自分の言葉で語るもので、学生の自主性を重視している。したがって学生が、このカンファレンスによって話したかったことは、分類したコードが最も多いところとなる。ナラティブカンファレンスを第1回と第2回に分けて、ナラティブアプローチが学生に与えた影響について考察する。

1. ナラティブカンファレンスが学生に与えた影響

1) 第1回ナラティブカンファレンスで得たカタルシス現象

第1回ナラティブカンファレンスにおいて学生が語った内容で最も多かったのは【実習を困難にしていた因子】について述べたコードであった。ここでの学生の語りは、実習のストレスが健康に影響を及ぼしていることや自己の未熟さ、劣等感から自分自身に自信を失い、カンファレンスに同席している学生や教員に受け入れられることでカタルシスを得ている。その現象は、学生にとって悲嘆作業であり、語ることが自分の気持ちの整理につながると考える。その様子は褥婦が自分の分娩にわだかまりを持つときに助産師が行うバースレビューにも似た現象であった。大熊⁹⁾によるとカタルシスとは、「うっ積していた不満、憎しみ、怒りなどを感情とともに表出することで心的緊張を解くこと」としている。ミッシェル・L・クロスリー¹⁰⁾は、ナラティブによって対象者が相手と自分を許し、自分を癒しへ導く作業となった事例を説明している。本研究でカタルシス現象を得た学生の語りについては、先に表2に示した通りである。

学生には、12週間に及ぶ実習で無意識のうちに自分の中に閉じ込めていたつらい感情や記憶があ

り、それは学生の心の傷として残存していた。それを語ることによって、少しずつ解放できたことがカタルシスを得る結果となったと考える。実習が学生にとってストレスフルであり、臨床指導者や教員との関係性が要因になっていることも先行研究^{11) 12)} から決して少なくないといえる。石村他¹³⁾ は、助産実習における学生のパワーレス状態に陥る教育者側の要因に、不適切な教育支援があるという。具体的には「否定的な言動や、同じことを何度も言われる、矢継ぎ早の質問、自分がやろうとしていたことを先に言われる、しっかりしなさいという言葉」などである。また、小笠原¹⁴⁾ は実習で看護学生が感じる困難に、指導者との関係があると「指導内容の違いに戸惑う、質問に答えられない、看護師が忙しそうで報告ができない、学生に対し看護師の言葉や態度が冷たいと感じる」などを示している。渡邊¹⁵⁾ は、「実習中の疲労症状が強い人ほど、実習に対する満足は低かった」ことを報告している。本研究においても学生2人は食事もできなくなり、体調不良がまた実習の困難性を助長していた。こうしたことから学生が実習を最後までやりとげようとするには、心身共に追い込まれる状況となり、心の傷は想像以上に深いことが推察される。

さらに、心の傷が大きく学生が抱えきれなくなるとトラウマ化することが懸念される。金¹⁶⁾ は、トラウマを広義と狭義に分類し、広義のトラウマを「その本人にとって、その時と同じ恐怖や不快感をもたらす続ける体験である」と述べている。そして、新山他¹⁷⁾ は、看護学生の実習によるトラウマを目撃トラウマ、聞くトラウマ、直接トラウマに分類し、直接トラウマでは「実習指導者からの暴言」「実習指導者の態度」「教員からの注意」が特にトラウマになりやすいと報告している。また、池田他¹⁸⁾ は「トラウマに影響を及ぼすものとして出来事が長期間持続し複数回同じようなことが起きる長期反復性」を挙げている。学生2名は、臨床指導者に繰り返し「あなたが受け持つことで

生まれたい」と言われることで、〈私が関わることで、そういうことはない〉とわかっているが〈自分に原因があるのではないか〉〈私が受け持たなかったらスムーズに生まれたのでは〉という思いにつながり、学生は追い詰められていったと考える。この事例は長期反復性に該当しトラウマを抱えてしまうことも懸念される。

こうした状態であった学生は、『カンファレンスに対する反応』で〈心が軽くなった〉〈今日こうやって、話を聴いたり話したり、泣くことで心が浄化される部分があるのかな、と思った〉〈(分娩経験件数へのプレッシャーについて)今はまずそれを話したかった〉と語った。話したいことを学生が話し、そして、その話を涙を流して聴く仲間がいることで、グループ・ダイナミックスが働き安堵して心の安定を生み出したと考える。

2) 第2回ナラティブカンファレンスで語られた自己と他者への理解

第2回ナラティブカンファレンスから抽出されたコードは、第1回ナラティブカンファレンスのように、カテゴリーによって大きな差は見られなかった。最もコードが多かったカテゴリーは【カンファレンスで得た気づき】であり、104コードのうち37コード(35%)を占めていた。また、つらく苦しい実習であったが中でも、自分の学びや他の学生の成長に気づくことができていた。

学生Aは、〈私は昔から自分に自信がなく、他人から褒められたり認められたりすることがあっても、それを素直に受け止めることができない〉といい、素直に自分の弱い部分を認めている。学生Aは、その話を受け入れ聴いている周りの仲間がいることで、〈自分に厳しく、頑張ってしまうことに気づいた〉と語り、弱い部分を含め自分自身であることを受け入れることができ、自己概念の肯定的変化が見られた。

学生Bは、第1回ナラティブカンファレンスで、なぜ自分が『分娩経験件数へのプレッシャー』に

ついて語ることに至ったのかを説明した。〈気を張っていて気づかないうちに抱え込んでいた、自分の中のわだかまりのようなものがあったのだろうなと思った〉というように、自分は知らないうちに心に傷を負っていたことに気づいている。〈傷ついたり我慢していた自分を解放する必要があったのではないかなと今は思っている〉というように、〈みんなと話すことで実習がつかったのは自分だけではないんだと心が軽くなり、我慢していた自分に気づくこと、ケースからの学びを改めて考えることができた〉と話している。学生Bは自分が実習がつかったと語って良い場所があることに気が付き、安心してつかった体験を語れたことに「こころが軽くなった」と安らぎを感じている。ミシェル・L・クロスリー¹⁰⁾は、ナラティブは「自分や人を許すことで癒しへ導く」としている。学生Bは、「傷ついたり我慢していた自分」を語りながら他の学生と思いを共有できたことで自己を許すことができ、癒しへ導かれたのである。

学生Cは、第1回ナラティブカンファレンス後、〈話したシーンを思い出す時が何回かある〉〈その時々で感じるものが違う〉と言った。その時を繰り返し思い出していくことで自分を客観的に見られるようになり、〈あのときの自分はこうだったんだな〉と思えることで今の自分がある〉と語っている。あの時があつての今の自分を強く意識し、〈今なら跳ね返せる気がする〉と一回り成長した自分を認識していた。

学生Dは、実習施設であったF病院を就職先として希望していた。その理由は〈F病院の助産師さんが対象者の話をしっかり聞いている姿をみたのでそう思った〉と話した。実習中助産師が褥婦の顔をきちんと見ながら話を聴いている姿を見たからであった。F病院は、授乳室があり対象者の話をじっくり聞ける環境にあることが就職希望の理由の1つであった。また、ナラティブカンファレンスを体験し〈ナラティブで聴くこと話すことが大事だと、すごく実体験しているの、対象者に実

践していきたい〉と語った。縄⁸⁾は、語ることで「…であるべき」「…であらねばならない」という反省ではなく、「…していきたい」という能動的な主体性・可能性への気づきが生まれる」と述べている。学生は、自己の実習経験やナラティブカンファレンスを体験し、自らの看護の発見につながったと考える。

学生Eは、〈実習終了後1か月ぐらい話し合った〉とし、第1回ナラティブカンファレンスだけでなく、学生同士で何度も語り合ったと話した。その中で〈学生同士で話すことで、わかってくれる人もいるんだと、結構力をもらった〉〈本当にわかり合える人が見つかっていく〉と話し、学生同士で理解しあえた経験をしていた。McAdams¹⁹⁾は、「探求作業(ナラティブを追い求めること)に着手するなら、それによってお互いの関係が一層強くなる」としている。また学生Eは、第1回ナラティブカンファレンスが実習終了後2週間であったことについて、〈あのタイミングで、この会(ナラティブカンファレンス)があつたことはすごい。本当にすごい良いタイミングだった〉〈(第1回ナラティブカンファレンス)がなければ「本当に嫌だった、嫌だった」だけで留まっていただけかもしれない。そこがあつての今〉と語った。学生Eは、何度も学生同士で実習の話をしたり聴いたりすることで、〈人に対して「このように言われて悲しかった」と思ったが、その中にも良いことがあり学びにつながったこともあつた〉〈一概に嫌なことだったということでもなかったのかなと、振り返った〉というように、学生C同様にあの時があつての成長した今の自分を意識していた。

トラベルビー⁵⁾は、患者との関係性を形成し、看護介入を行うためには、「自己洞察、自己理解、人間行動の力動性の理解、他人の行動はもちろん自分の行動を解釈する能力が必要である」と述べている。5人の学生は、自己をさまざまな角度から客観的に見ることができ、今の自分を理解し肯定的に受け入れることができていた。これは、自己洞

察、自己理解の学びであったと考える。

3) 第1、2回ナラティブカンファレンスの関連性

第1、2回ナラティブカンファレンスの関連性を図1に示す。第1回ナラティブカンファレンスがあったことで、その後、学生同士の繰り返された自主的なカンファレンスが開かれ、第2回ナラティブカンファレンスでは、語られた内容や学生の様子に大きな変化が見られた。

第1、2回ナラティブカンファレンスは、独立したのではなくその関連性が学生の語りの変化を生み出したと考える。

第1回ナラティブカンファレンスでは、学生B, C, D, E は実習が自分の健康も脅かすほどのストレスがあったこと（喪失体験）や自己の未熟さ、劣等感から自分自身に自信を失っていたこと（自尊心の低下）を語ることで「悲嘆作業」となっていた。共にカンファレンスに出席した学生や教員に受け入れられることで、「カタルシス」を得ている。また、学生Aは「自分の黒い部分」に向き合うという経験をする中で学びになったことを実

感している。こうした過程を経たことで「ケアする楽しさ」「支えてくれた人への感謝」「反省的経験」が、学生の学びとなっている。

第2回ナラティブカンファレンスでは、実習はつらいことが多かったが、その中で学びや楽しかった良かったと思えることを語る事ができた。第1回ナラティブカンファレンスでは自分に対して、また臨床指導者に対して否定的だった考え方が、その後も続けられた学生同士の自主的な話し合いを繰り返すことで客観的に自分を見つめ弱い自分を受け入れることができ（自己概念の肯定的変化）、自己の内面と向き合うことができ（自己意識の拡大）、前向きな気持ちへと大きく変化した。自己を客観視しその自分を肯定的に受け入れることで、他の学生の成長などの「気づきの拡大」、そして、「指導者自身も学生のと き理不尽な指導を受けてきたのかもしれない」と「他者への理解」を示していた。それから、「自らの看護の発見」「自己理解」「自己解放の必要性」について学習し、自らの成長を学生は自覚していた。

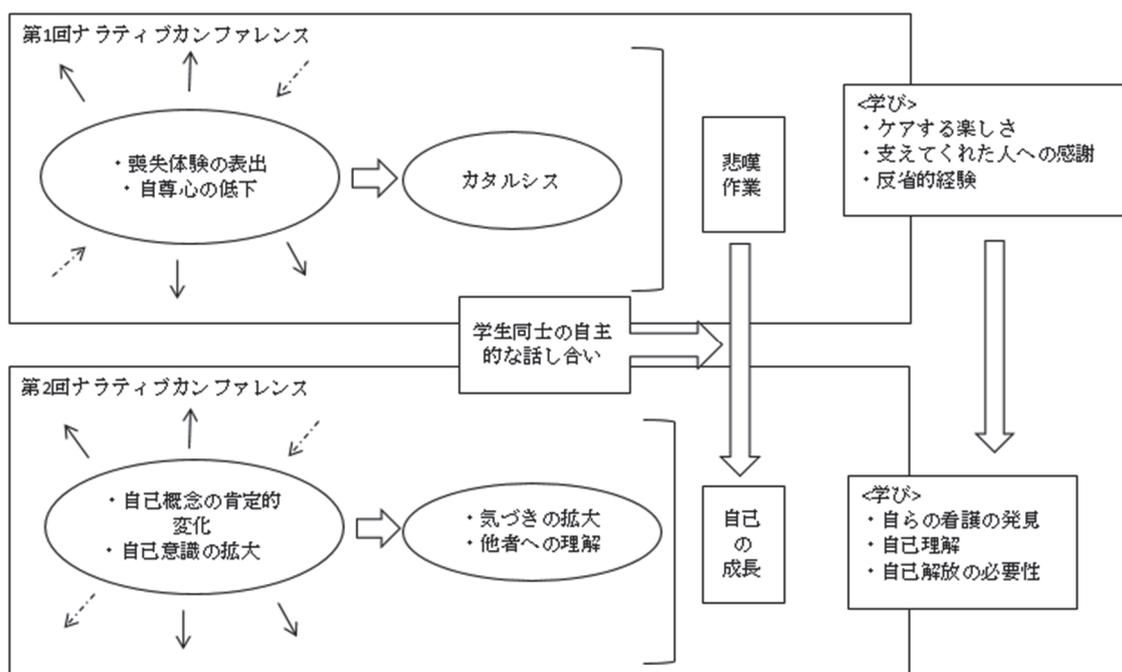


図1 第1、2回ナラティブカンファレンスの関連性

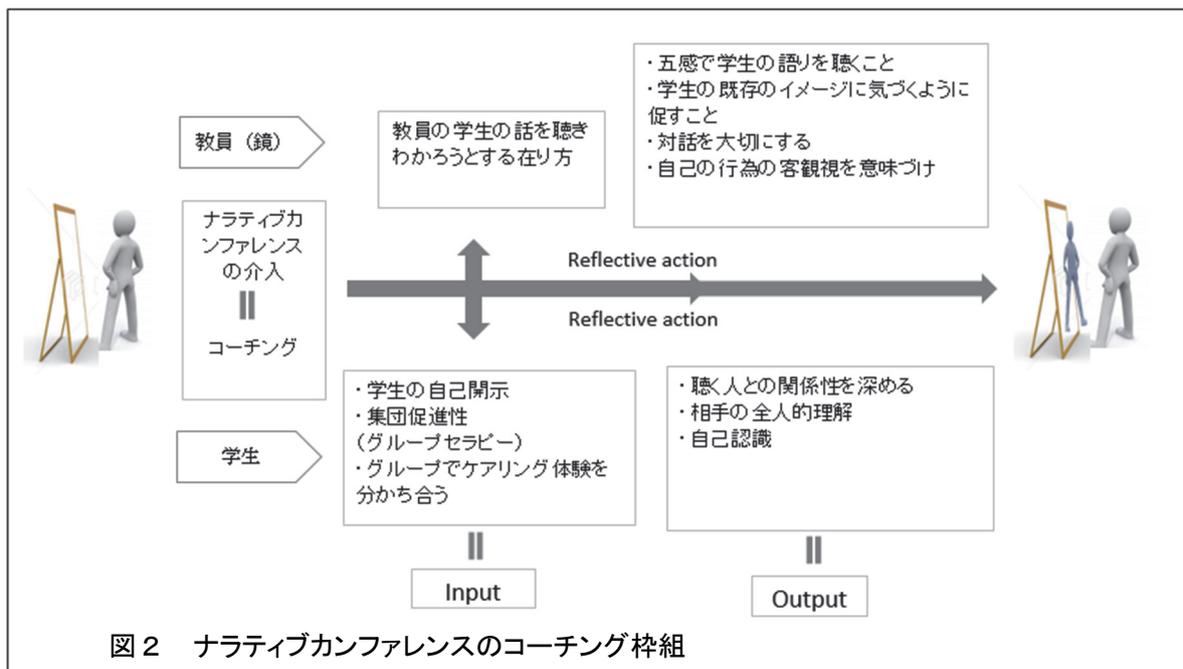
2. ナラティブカンファレンスによるコーチング効果

第1、2回ナラティブカンファレンスを行うことにより、学生は先に示したように自己を客観視できるようになり、自分や他の学生の成長を自覚できるようになった。ナラティブカンファレンスを行うことで、学生が自主的にカンファレンスを繰り返し、成長を得られたと考える。この大きな変化に至ったのは、ナラティブカンファレンスが学生の成長にとって一連の効果があったと考える。

ショーン³⁾は、「“反省的実践家を育てる教育”の特徴は、なすことによって学ぶこと、そしてそれをコーチすることの重視である」としている。具体的に実習のコーチング法として、“協働実験”“ついてきなさい”“鏡のホール”の3つを挙げている。「コーチは常に、“ついてきなさい”アプローチを用いて実習について学ぶべき実践を学生に伝えようとするであろう。コーチは実習の中で実演し、学生がそれを模倣することを期待する」としている。しかし、実習で大切な教育者の関わりとして「コーチが実践した学生の鏡になってあげることが、実践における行為の理論を学ぶための重要な方法」として位置づけられている。第1、2

回ナラティブカンファレンスにおいて、学生の変化を図2に示した。

第1、2回ナラティブカンファレンスによって、聞き役であるW助産師は学生の話「五感を働かせ」「対話を大切に」して「学生の気づき」を促すこと、つまり教員が「学生を理解しようと話を聴く在り方」が“鏡”となったと考える。学生は、話すこと聴くことによって「体験を分かち合い」鏡に映る自己や他者を正しく認識することができ、「自己認識」「相手の理解」へとつながった。つまり、学生は実習が終了した時点では、ただひたすらにつらかった実習という認識であったが、ナラティブカンファレンスによってつらかった実習の中でも、自分や他の学生の成長していた姿を確認することができたのである。ショーン³⁾は、「学び取ったパターンをそのまま直線的にあてはめようとするのではなく、多様な視点からの解明を続けていく。多重の省察が照らしあわせ生み出される」ことを“鏡のホール”と位置づけている。したがって、ナラティブを導入したカンファレンスを行うことは、ショーンの示すところのコーチングとしての効果であったと考える。



3. 研究の限界と今後の課題

本研究は、本学大学院1年生13名のうち研究への協力に同意を得られた5名が研究対象であった。したがって、学生が行っていた実習施設に偏りがあり、人的環境には施設ごとに大きく違いがあることが考えられた。今後は、実習施設の人的環境の違いが学生の学習にどのような変化を生じるのかを明らかにしていく必要がある。また、すべての実習施設の実習環境を確認し、学生にとって実習しやすい環境を整えていくことが今後の課題である。

また、長期にわたる実習で学生は想像以上にストレスフルな状況に追い込まれていることが明らかになっている。学生と教員との関係性において、「学生が自ら話をできる関係性」を構築していき、学生が自信を持って実習を続けていけるような関わりが必要である。

VII. 結論

1. 第1回ナラティブカンファレンス

ここで語られた内容から【実習中の自分を支えた因子】【実習を困難にしていた因子】そして【自己の内的因子】の3カテゴリーが抽出され、中でも1番多く語られた内容は【実習を困難にしていた因子】であった。そして【実習を困難にしていた因子】を語ることでグループ・ダイナミックが働きスカタルシス効果を得た。

2. 第2回ナラティブカンファレンス

第1回ナラティブカンファレンス後に、繰り返された学生の自主的なカンファレンスによって、その語りは肯定的な思考へと変化していた。

ここで語られた内容から【実習体験の振り返り】【客観的自己への気づき】【カンファレンスで得た気づき】【他者への理解】【自己課題の発見】の5カテゴリーが抽出された。

ナラティブカンファレンスは、学生にコーチン

グ効果を与え自分を客観的に洞察し、頑張った自分や弱い自分を認めることができ自身や他の学生の成長に気が付くことができた。

謝辞

本研究に協力いただきました学生の方々に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 全国助産師教育協議会 助産師教育研修センター, 助産師教育に関する資料, 45, 141, 130-131, 2014.
- 2) 日本助産師会. 助産師の声明/コア・コンピテンシー, 5, 2012.
- 3) ドナルド・A・ショーン/訳柳沢昌一, 村田晶子: 省察的実践者の教育, 400-410, 鳳書房, 2018.
- 4) 日本看護協会. 国際助産師連盟戦略2017年～2010年, 6, 2017. <https://www.nurse.or.jp/nursing/international/icm/index.html>
- 5) Traverbee, Joyce. /訳長谷川浩, 藤枝知子: 人間対人間の看護, 23, 医学書院, 1974.
- 6) 野口裕二: 物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ, 医学書院, 2003.
- 7) 植村由美子他: 看護教育にナラティブを取り入れることの意義と方法, 神奈川県立保健福祉大学誌, 第2巻1号, 63-72, 2005.
- 8) 縄秀志: 教育に活かすナラティブ. インターナショナルナーシングレビュー, 38-43, 2007.
- 9) 大熊輝雄: 現代臨床精神医学, 金原出版, 500, 2008.
- 10) ミッシェル・L・クロスリー. 角山富雄, 田中勝博監訳: ナラティブ心理学セミナー, 182-208, 金剛出版, 2009.
- 11) 荒川千秋他: 看護大学生における実習のストレスに関する研究, 目白大学健康科学研究, 3号, 61-66, 2010.
- 12) 五木田和枝他: 看護学生のストレスに関する研

- 究の動向ー日本における過去6年間の文献検討ー, 日本看護科学学会学術集会講演集, 115-121, 2010.
- 13) 石村美由紀, 古田祐子, 佐藤香代. 助産実習における学生のパワーレス状態に関する研究ーその要因と回復の促進ー. 岡山立大学看護学研究紀要 12, 13-23, 2015
- 14) 小笠原陽子. 文献による臨地実習で看護学生が感じる困難. 八戸学院大学短期大学部研究紀要, 第45巻 21-37, 2017
- 15) 渡邊賢二. 護実習前・中の疲労症状に関する調査, 医学と生物学, 147(4), 53-57, 2003
- 16) 金吉晴. 心的トラウマの理解とケア. じほう. 3, 2001
- 17) 新山悦子, 佐藤健二. 看護学生の実習によるトラウマ. 第35回看護教育, 169-171, 2001
- 18) 池田龍也. 岡本裕子. 森田修平. トラウマと心の傷に関する研究の動向と展望ー何が人を傷つけ苦しめるのかー. 広島大学心理学研究 第13号 p91-105, 2013
- 19) McAdams. D. The Stories we live by: Personal Myths and the Making of the Self, 1993.